

香港ディアスポラ／移住者の現状

講演者：伯川星矢氏（香港出身のフリーライター）

Neco氏（仮名、香港出身、イギリス在住のフリージャーナリスト・通訳者）

司会（記録編集）：村井寛志（所員 神奈川大学外国語学部教授）

前書き

本稿は2022年1月に行われた神奈川大学中国語学科主催のオンライン（zoom）講演会「香港ディアスポラ／移住者の現状」の記録である。香港では、2019年の反政府抗議活動への政府の強硬姿勢と、それに続く、2020年6月の中国・中央政府による香港国家安全維持法施行を受けて、政治的迫害への恐れや、あるいは政治的自由のない香港の将来に希望が持てないことを理由に、多数の市民が海外に移住する状況が続いている。本講演では、日本で香港人の移住者の支援に携わった経験のある伯川星矢氏と、自らロンドンに移住したNeco氏（仮名）から香港人の海外移住の現状についてお話を伺った。まず伯川氏から背景となる近年の香港の政治状況と海外移住の概況について話して頂いた後、Neco氏の移住当事者としての経験について、伯川・村井を交えた鼎談形式でお話を伺った。本稿は講演の記録を基に村井が文字起こしと編集を行ったもので、文字化に当たり、紙幅の関係及び講演者の安全への配慮から、学生や一般聴衆を想定した香港政治の概説部分や、個人情報につながる恐れのある部分を割愛し、また一部表現を改め、短縮するなどした。

1. 香港からの移民の概況

伯川：香港の人は海外に移民・移住する人が多いとよく言われますが、歴史的に香港では移民ブームが何度かありました。第二次世界大戦後の工業化の時期や、1967年の香港左派暴動の後、あるいは中英共同声明（1984年）や（六四）天安門事件（1989年）の後に、中国に返還された後の香港の前途に不安を感じる人々の海外への移住が盛んになりました。2014年の雨傘運動の後も、中国大陸との矛盾が激化する中で、香港の前途に対して不安を持った香港人が多数海外に出ていきました。2020年の香港国家安全維持法（国安法）制定後の現在も移住者が増えています。

これまでの移民ブームの中で、現在のところ一番移民のピークだったのは天安門事件の後とされています。1990～94年の5年間に約30万人の香港人が香港を出ました。ただし、直近、2020年7月から2021年6月までの一年間で約9万人が海外移住をしています。天安門事件の時は5年かけて30万人、平均すれば6万人/年程度の移住者だったのに対して、直近では9万人/年が海外移住していることになります。実際には今が移民のピークであるといっても過言ではないかもしれません。

日本での受け入れについて紹介すると、一昨年から「対中政策に関する国会議員連盟（JPAC）」というのがありまして、実質的に山尾志桜里議員（当時）が主導して、日本におけるライフポート政策や、日・中刑事共助条約の不履行を求めて活動していました。ただ残念なことに、この議員連盟の動きは最近ではほぼ止まっている状態です。

その後、すでに日本に移住している在日香港人が新たに来た香港人の定住を支援する団体というのが出てきました。日本香港人協会というNGO団体です。過去に日本にも香港と関係する団体がありましたが、そういったものはほとんど経済交流を中心とした団体で、ビジネスの推進を目的としていました。これに対し日本香港人協会は新来の香港人への支援以外にも、香港文化の伝承として、香港式ミルクティーの淹れ方など香港の文化を紹介するイベントや、広東語や日本語を教えるボランティア活動を中心

に活動しています。過去に日本ではこういう団体はなかったので、特徴的かと思います。日本でも今香港人が増えてきているので、こういった団体が行政との間に立ってサポートする役割を果たして行くのではないかと考えております。

次に他の国での香港人移民に対する政策を見てみます。まずアメリカは以前から香港人の移住が結構多いのですが、現在アメリカは、難民認定をする場合、香港人だけは人数制限なしで認定を行うと宣言しています。イギリスは、英国海外市民（British National (Overseas)）パスポートという、旧植民地向けパスポートを持っている人に対して、最短6年でイギリス国籍と市民権を与えるというプログラムを打ち出しています。オーストラリアとカナダは政策が近くて、ライフボート政策を設定して、香港から移住を希望する人に対して3~5年程度で永住権を付与するようなプログラムを取り入れています。台湾ですが、専用窓口を設置して定住をサポートするといった活動をしています。

最後に、中国や台湾から移住した人々を指す言葉に「華僑」という言葉がありますが、この言葉は中国大陸から移住した人々と香港人・マカオ人を区別していません。いま比較的新しい言葉として「華僑」ではなく「港僑」という言葉が出つつあります。在外香港人はやがては「港僑」と呼ばれるようになるかもしれません。

2. イギリスへの移住までの経緯

村井：ここからは、Necoさんにイギリスに移住する過程やイギリスにおける香港人の状況についてお話を伺いながら、伯川さんの方から日本と比較して補足して頂く、鼎談の形で進めたいと思います。Necoさん、差し支えない範囲で自己紹介していただけますか。

Neco：今はイギリスに住んでいますが、香港を離れる前は日本のメディアの通訳をしたりしていました。その後色々ありまして、今はイギリスにいます。皆様にも少しでも香港の状況についてお伝えできればと思います。

村井：日本語はどうやって勉強されたのですか。

Neco：小学生の時に親から日本の漫画をもらって、それで興味を持って自発的に勉強していました。中学になってやっぱり日本に行きたいなと思って、結局、日本の大学に行きました。

村井：香港の方は、アグネス・チョウ（周庭）さんとか、日本のアニメやアイドルが好きで、自分で勉強して日本語が上手になったという方が多いですね。移住前の香港の状況は、御自分の小さい時に比べて、あるいはここ数年で急速な変化があったと感じていましたか。

Neco：そうですね。もちろん政治的なこともあります。私が子供の頃はまだ返還の前だったので、返還後は香港の中国化がすごい進んでいると日々感じていました。離れる前にはもう私が知ってる香港じゃないと思ったこともあります。例えば町で中国人があふれていたり、中国人だけに向けたお店が増えたり、中国語が聞こえる機会が増えたとかがあります。中には街中で非常識な行動をとる人もいましたが、警察は注意すらしないことが多く、一方で香港人がちょっとでもおかしいことをすれば注意されたり逮捕されます。どうしてこんなに差が出るの、みたいなことをすごい感じました。

村井：中国からの観光客というか、実質は関税逃れの密輸もあると思いますが、香港経済が中国に依存するに従って、香港の風景が中国人のお客さん向けに変えられていったという、生活実感のレベルで変化があったということでしょうか。

伯川：その通りです。自分が香港にいたころ住んでいたところの最寄り駅は深圳のゲートの一つ手前の駅だったのですが、中国人観光客が中国に帰る前に最後の買い物をして、近くのショッピングモールとかで詰め込んでいきます。みんなキャリア・ケースを持って、人にお構いなくぶつけながら移動するとか、よくありました。ショックだったのが、僕が住んでいた上水という街には古いショップハウスみたいなのが結構あったのですが、そこが一区画まるまる潰されて、20階建てのショッピングモールができました。周囲のショップハウスは大体三階ぐらいしかないんですけど、その端っこに突然釘が刺さったように一本ショッピングモールが立って、そういったところで街並みが変わったと感じました。自分が小・中学校からずっと通っていた文房具屋さんとか飲食店とかが潰れて粉ミルク専門店になったりということもあります。コロナ禍の中でだいぶ減ったのですが、それでも一度変わった経済体系はなかなか戻らないです。そういった中国の観光客専門のお店が潰れても家賃が高くなって、他の人に貸すこともなく、空きのままで、異様な風景が漂っている状況です。

村井：景観レベルの変化にプラスして、中国からのお金が入ってきて家賃がものすごい上がり、地元の人たちの生活が大変になったというのが背景の一つとしてあるように思います。そこへきて言論の自由への締め付けが強まったという政治的な状況が加わったところが、香港の方々の反発を生んだと思います。言論の自由に関しては感じることはありましたか。

Neco：私は去年香港を出ましたけど、ただみんなでデモのスローガンのステッカーを所持してただけで職質されたり、という状況になっているので、香港人から見て文化大革命みたいなことになっているように思います。

村井：過敏に言葉を取り締まり、ほのめかすだけで捕まるのではないかという不安が広まっているかと思っています。そうした状況の中で、Necoさん自身はいつ頃から海外に出ようと考えられましたか。

Neco：2019年のデモが一番酷くなった時に、こういう状況ならば早く香港を離れた方がいいかと思い始めました。2020年になって、国安法ができるかもしれないと聞いて、海外に出て様子を見ようと思えます思うようになりました。その後、国安法が施行されてすぐに色々な人が逮捕されて、香港を離れる決心が固まりました。

村井：その時は、家族とか友人とかに相談してから決めたのですか。

Neco：まず自分で決めましたけど、家族とも話しました。家族からはもう香港から出た方がいいと言われました。友人達ももうこんな香港では暮らしくいと、移民のプランを立てたりしていました。私より先に香港を出てしまった人たちもいました。知らないうちに、もう海外に着いたという連絡を受けるといこともありました。先週まで会っていたのに、その後はしばらくSNSの更新がないと思ったら、いきなり更新があって、もう海外に居る、みたいな人を5人くらい知っています。

村井：周りで移民という選択が多くなったということですが、そこでイギリスに向かおうとしたのは何故なのですか。日本語がお上手なので日本とかも考えられたと思うんですが、イギリスを選んだ理由やきっかけは何かありますか。

Neco：伯川さんから解説があったように、各国の香港についての移民政策の中でイギリスが私にとって一番行きやすかったということがありました。日本に行こうかとも思ったんですけど、香港から離れようとした時にはもうすでにコロナ禍があって、日本での就職は難しいと思い、とりあえずまずイギリス行こうと思いました。返還前の香港で生まれた人々は先程出てきた英国海外市民（BN（O））パスポ

ートを持って、イギリス国籍ではないのですが、イギリスへの出入りが結構緩いので、そういうところを踏まえて決めました。

伯川：僕も BN (O) パスポートを持っています。これ出すと年齢バレますよね。

村井：BN (O) パスポートが問題なのは、"British National" (イギリス国民) と書いてあるのに、これだけだとイギリスに住めないんですよ。

伯川：そうなんです。イギリスの居住権を伴わないパスポートなんです。香港人はパスポートの国籍と永住権を綺麗に分けて考えていて、そもそも香港自体は国ではないので、香港自体のパスポートはありません。「香港パスポート」は厳密に言うと、主権を有する中華人民共和国 (中国) のパスポートの一種になります。それ以外に英国海外市民 (BN (O)) パスポートというのが一応、通行手形のような扱いで存在しています。トラベルドキュメントとして扱われるのですが、これを所有しているからといってイギリスに属しているというわけではありません。植民地政策の名残として 1997 年 6 月 30 日までに生まれた人がこの年の 7 月 1 日より前に申請した場合だけしか所有できません。この日以降は新規取得はできないので、その当時取得しなかった人は一生取れません。

村井：これは元々旅行に使えるだけでしたが、2020 年の国安法施行により中英共同宣言で定められた香港の高度の自治と五十年不変の原則が犯されているとして、イギリス側がこれに抗議する形で、このパスポートの保持者のイギリスへの移民のハードルを下げました。

伯川：今は BN (O) パスポートを持っているとイギリス移民がしやすくなります。香港人向けの特別な政策として、通常の移民ルートと異なるルートを設定しているので、香港の人にとって、政策面だけというイギリスが一番行きやすくなりました。

3. 移住後の生活とコミュニティの形成

村井：次に移住後の生活の方に話を移しましょう。Necoさんはイギリスに移住してどのくらいになりましたか。

Neco：2020 年の秋に香港を出たので、もう 1 年 3 ヶ月位になりましたね。

村井：移住してからの生活はどうか。移住前と後でイメージに変化はありますか。

Neco：とりあえずイギリスの食事はまずいと言われて、ずっとそういうイメージを持っていましたが、思ったよりおいしかったです。あとは、イギリスはすごく寒いとか言われたり、曇りばかりとか、そういう話をいっぱい聞きましたけど、全然違いましたね。思ったより寒くないし、多分、東京と同じような感じかな。晴れた日も思ったよりあります。だから思ったより快適かも知れないです。

伯川：自分がイギリスに行った時は白夜で、夜 10 時までもずっと太陽が出てて、なんかもうすごい時間感覚が狂ったという記憶がありますが、そういうのは慣れますか。

Neco：オタクで、あんまり外に出ないので (笑)。今は冬になっていて、午後 3 時ぐらいから夕方、4 時はもう真っ暗です。「ネコ」だから夜が長い方が助かります。

村井：食べ物意外とおいしかったということですが、香港から移民が増えると、香港料理の店を開くとか、香港の食材を輸入したりする人が増えて、香港関係のものが手に入りやすくなるかということはありませんか。

Neco：イギリスは昔から香港人が移民して来る国だったので、ある程度食材は揃っていますが、ここ一年ぐらいで香港人が増えていて、香港の食べ物がもっとあった方が良いとかいう話をよく聴きます。まだお店の側もそんなに用意はしてないですが、香港人向きの食材の店を開こうという話は聞くので、これからは増えていくと思います。

村井：日本についてのこういう話は伯川さんが詳しいと思いますが。

伯川：香港からの移住者は確かに増えていると思います。香港出身者の統計は十数年前まであったのですが、今はなくなってしまい、実際にどのぐらいの香港人がいるかという数字は出てこないのですが、肌感覚で、日本に来ている香港人が増えたなと思います。神奈川大学から近いところで、綱島の八十港っていうお店があるんですけど、そのオーナーさんも香港人で、自分は仲が良いのですが、2019年の後半頃に日本に移住してきて、香港料理店を営んでいます。東京都内に関しても香港料理店が結構増えていて、またインターネット通販でHKストアという、ビタソイという香港の豆乳等を扱っている輸入業者がありまして、そこも香港の方が運営しています。

そういう細かいところで、香港人が増えてきていると感じます。僕は2013年に日本戻って来んですけど、その時に比べて香港のものを入手しやすくなりました。中華街に行くと、香港料理と書いてあっても大陸のものということが多かったのですが、本当の香港料理が増えています。実際、そういうお店に行ってお客さんとしてくる香港人と広東語で話していると、実は最近来たんだという話を聞き、香港人の移住ブームが来たなという感覚があります。

ただ、やっぱりコロナ政策で留学生がまだ来られないので、日本が外国人受け入れを再開し始めたらさらに増えるのではないかと思います。今、日本に長期で来られる方は経営・管理ビザで来ている人がほとんどで、それ以外のビザがほとんど下りてない状態です。恐らくいろいろな大学で香港からリモートで授業を受けている人も結構いるので、そういう人たちが日本に来始めると、さらに増えるのではないのかなと踏んでいます。

村井：香港の場合不幸なのは、政治的な締め付けが非常に強まった時期と、新型コロナの流行の時期が重なってしまったということがあります。移動したい人が多い時期に移動しにくいことになりました。

伯川：香港の対新型コロナ政策と政治的な圧力は表裏一体だと言っていいと思います。コロナを口実に、行動制限するとか、人の密集を制限するとか、大義名分があるので、国家安全維持法ももちろんあるのですが、それ以降デモはほとんどなくなりました。デモじゃなくても、ただ集まっただけでコロナ禍の集合禁止違反で罰金をとられるとか、そういったことがあったりします。もし自分が香港政府当局者だったらいい時期だなと思ってしまうぐらい、すごい都合の良い法律ができています。時期が悪いというのもありましたが、まあ政府がうまいってことも香港人を苦しめている理由になっていると思います。

村井：イギリスの方はどうですか。コロナと重なってしまってロックダウンもあって、生活が大変だったと思うのですが。

Neco：さっき言ったとおりオタクなので、スーパーとかは開いてるし、生活面だけで言えば全然困りませんでした。でもやっぱり友人と会うのが難しくなっています。レストランとかは開いておらず、外

食はできなくて持ち帰りしかできないので、社交的な面では結構困りましたが、他の面は大丈夫でした。

伯川：先程イギリスで香港人が増えたという話がありましたが、友達が増えたとか、街に出たら香港人がいっぱいいるとか、実感できる感じですか。

Neco：2020年秋に来た時は香港人と知り合う機会が全然なくて、2021年の5月か6月ぐらいに急に広東語がいっぱい聞こえるようになって、そこで勇気を出して、いろいろな人に話をかけていたら友達がたくさんできました。私が住んでる町では今まで香港人が集まろうという雑談のグループもなかったのに、急にそういうのができたり、ネットのつながりも増えています。

伯川：イギリスでの香港人の繋がりが色々あると思いますが、そこでお互い助け合ったりとか、日本みたいに組織が出来上がってきたりとかいうことはありますか。

Neco：「英国港僑協会（Hongkongers in Britain）」という団体が2020年7月にできました。香港からイギリスに移住してきた人々のために、ビザのトラブルとか、困っていることで支援しています。港僑協会は規模もそれなりなのですが、地方によってはその地方で助け合う小規模な組織ができてるという話も聞きます。

伯川：「港僑」の団体ですね。イギリス全体だと広いので、ロンドン以外の小さな町とかでも香港人同士が繋がる組織もあると聞いたことがあります。日本ではまだ東京中心ですが、香港人移民の人数が増えていくと、そういった組織も自然と増えていくのかなと思っています。自分が作ればいいだけの話なんですけど。

4. 抗議活動の継続と妨害、イギリスの受け入れ政策

村井：Necoさんの移住後一年間の間に香港からいろんなニュースが流れてきたかと思います。民主化寄りの人が逮捕されたりメディアが封鎖されたり、選挙制度が改悪されたりとか、そういった事態について、イギリスにいる香港人同士で話したりとかいうことがありますか。

Neco：香港を離れていても、やっぱり香港人なので、香港のことについて新聞を見てますが、『アップル・デイリー（蘋果日報）』とか『立場新聞』とかがなくなってしまって、香港の情報を手に入れるのが難しくなっていると感じます。

村井：民主派寄りのメディアが潰されているだけでなく、2019年の抗議行動の時は市民メディアと言われる、特定の組織に属してない人たちが前線に出てカメラを回してたということがあったのですが、それも制度を変えられて、記者と認定されなくなりました。指定されたメディア企業に勤めている人じゃないと取材しづらい形になっています。僕ら研究者もコロナで香港に行かれていないので、非常に情報を得るのが難しくなってきたと感じますね。

伯川：メディアを認定するという話ですが、大手メディアしかメディアとして認めないというのが今の流れです。香港域内にあるメディアに関しては有名なメディアのみ、紙で発行しているというのが基本的前提条件になっています。『立場新聞』は閉鎖されていなくても除外されることになります。中道派とか親中派の新聞は記者として認められていますし、普通取材できないような場所でも取材しています。市民メディアは大体ネットメディアで、かつてはFacebookとかツイッターでデモや衝突の現場からライブ中継していた人が結構いたのですが、残念ながら今は多分カメラを回してるだけでも、メディアで

もないのに何を撮っているのかと、警察に職質されたりすると聞いています。

海外のメディアはどうなるかと言いますと、警察発表では大手メディアは認めると言っています。しかし香港の警察がどこを“大手”と認識しているかは分かりません。もちろんCNNとかFOXとかはさすがに大手だと思いますが、日本のテレビ局が取材に行くと、“大手”メディアじゃないから駄目だと言われたらもう笑い事だなと思います。国家安全維持法と通じるのですが、曖昧にしてコントロール権を握るようにしているので、結局メディアかどうかというのは記者証を持っているか、メディアに属しているかということではなく、警察がメディアだと認めたものだけがメディアということになってしまいます。

村井：話題が若干逸れてしまいますが、こういう状況で、伯川さんが海外にいながら香港の情報を得る時に、どういうことに気をつけますか。

伯川：できる限り身内から情報を入手するようにしています。身内でもメディアをやっている人がいますので、なるべくそういったところで入手するのですが、自分も仕事柄、取材をたまにやっているので、完全に匿名にしたりします。今回のNecoさんの対応には本当に感謝しています。こういう風にお話していただくのも今は本当に難しいですね。身元がばれるのも怖いですし、これから移住をしようとしている人も多くて、移住に何か影響をもたらすのではないかと、疑心暗鬼になっている人が多いです。自分も物書きとして、プライバシーについては最大限配慮して、インタビューを受けてもらった人の安全を最優先にした上で伝えられる情報しか日本に持ってこられません。これは当然のことですが、もっと伝えたいと思っても内情を伝えきれないことがあって、すごく難しいなと思います。

村井：国家安全維持法は曖昧で、どこまで大丈夫なのかよく分からない、何が捕まるかわからないということがありますが、しかも最高刑は無期懲役です。どうしても慎重にならざるを得ないという状況がありますね。しかも海外に行っても指名手配になったりするので、海外に行ったとしてもなかなか発言しにくいという状況かと思うのですが、イギリスの方ではいかがでしょうか。それでも発言する人という人はいますか。

Neco：私が聞いている限りでは、2019年の香港のデモが始まった時に、イギリスにいる人たちがデモとか集会をやろうとしたけど、現場に中国人がやってきて嫌がらせをしてくるというのがありました。例えばスマホで顔のアップを撮って後で身元を調べるからなと脅されるとか。コロナ禍もあり2020年の中旬からは余り活動しなくなっていると聞いています。

自分の知っているところだと、先週ぐらいに、こちらの人々が複数の都市で『立場新聞』のためにデモを起こそうとしましたが、例えばマンチェスターでそういう集会があった時に中国人がやって来て、写真を撮りに来たり喧嘩を売ってきたりとかいうことがありました。去年(2021年)の11月にもロンドンで香港のためのデモがあって、そこで中国人が香港人を殴りました。警察が呼ばれて殴った人が逮捕されましたが、それ以降、香港人の小規模な組織の間で、中国人に身元を知られたら怖いなという話をたくさん聞きました。だから、イギリスに来てもしっかり中国の影響下で生きてるんだなと考えさせられます。

村井：イギリスも中国系の人が多くて、恐らく多くの方はそういう嫌がらせに直接関わっているわけではないと思うのですが、大使館とか領事館が働きかけてそういうことをさせてるのではないかというような話は、日本でも時々聞きますね。

伯川：日本でも何回かデモや集会とかありまして、自分も組織していたのですが、中国の方がいらして五星紅旗を持ってきて、「港独操你妈」(香港独立クソくらえ)とか中国語でずっと怒鳴ってきて、警

察が来て退去させたりとかがありました。特にひどかったのが、大阪の南海なんば駅で一昨年「人の鎖」という行動をやった時には、数十人の、恐らく中国の領事館のサポートを得ていると思いますが、自称“観光客”がものすごい大きな中国の五星紅旗を持ってきて、現場で活動している香港人に対して抗議をしたというのがありました。

東京ではそこまで大きくならなかったのですが、数十人規模の中国の方がやってきたということで、自分にはいなかったのですが話を聞いて怖いと思いました。自分もデモを組織したことがあって、終わった後しばらく十分位あとをつけられ、警官がやってきて退去してもらったということがあります。海外だからデモをやっても安全だというわけではなくて、外国にいてもその国に住んでいる中国人住民がいますし、海外に住んでるからといって必ずしも同情的とは限らないですね。

ただここで一つ言っておきたいのですが、決して中国人が嫌いだと言いたいのではなくて、中国の方々にも香港の活動を支援してくださる方もたくさんいます。もちろん彼らは香港人以上に顔も出せないし、声も出せない。本当に密かに、デモの隅っこに参加したりとか、そういった方もいらっしゃると思います。必ずしも中国人だから悪と言いたいわけではありません。ただ、現実として、どちらの側の人もいるという事は皆さんにぜひ知っていただきたいと思います。

村井：在外中国人では何も発言しないの方がマジョリティではないでしょうか。表に出てきて、香港人に対して嫌がらせをしたりという人は多分相当少数派だと思います。ただやっぱり、やられた方からすると、そんなのはごく一部の人のだからと言われても怖いでしょうね。そのことは言うておく必要があると思います。

そうした中で、日本のメディアでも取り上げられているネイザン・ロー（羅冠聰）さんとかサイモン・チェン（鄭文傑）さんとかは、亡命の状態なので、多分香港には戻らないという感じで移住後も政治的な発言をされているのだと思います。例えばこういう人たちについては、イギリスの香港人の中ではどのように見られているのでしょうか。

Neco：この二人はすでに香港政府から指名手配を受けているので、もう香港には戻れないと思いますね。サイモンさんはさっき言った港僑協会の創始者ですし、ネイザン・ローさんも昨年末から香港人支援組織「香港協會（Umbrella Community）」を立ち上げました。こちらの香港人は彼らの発言を見てSNSでシェアしたりしてます。イギリスに来た香港人たちは怖いと思いつつも、香港のためにせめて声を挙げたいという気持ちもあるので、彼らの活動を応援している人が結構います。

ネイザン・ローさんは、イギリスだけではなく、あちこち飛び回っていて、例えばアメリカに行って議会で発言したりとかしています。サイモンさんはイギリスに集中していて、最近ではイギリス全国の大都市の香港人のためにイギリス政府から支援金をもらったという話も聞いています。大規模な動きをしていて、すごいと思っています。

村井：イギリス政府から支援があったということですが、イギリス政府、あるいはイギリス市民に対して望むことはありますか。

Neco：個人的には、返還後に生まれてきた香港人もイギリスに定住できるようにしてくれたらいいと思っています。今、イギリスが香港人に出してくれているビザは、BN（O）パスポートを持って人しか適用されないビザなので、2019年のデモでは学生など若い人が香港のために戦いましたが、そういう人々が香港から出られないことも多いです。外国のパスポートを持っていなかったり、若すぎて留学も難しいとか、家がお金がなくて海外にいけないとかがあります。難しいとは思いますが、イギリス政府には、なんとかしてあげてほしいと思います。

伯川：直近ではイギリス政府は少し対象を拡大させて、両親がBN（O）を持っていれば子供を連れて

行けるという形に拡大しようとしていますが、それでも救いきれない場合があります。雨傘運動の頃から香港の社会運動には世代間の矛盾があると言われていますが、親世代と子供世代で香港という場所に対する想いだったり、民主とかの価値観に対する考え方も違って来ます。親子の間でなかなか意見が合わず、家出したという話も聞かれますが、そういう場合、例えば15～16歳の子どもがデモに参加したので海外に出たいと思っても、親はBN(O)持っているがイギリスに行きたくないとすれば、子どもも行かれないということになります。

なので、もちろんイギリスにはそういう人も受け入れて欲しいと思っていますが、香港人は賢いので、あえてイギリスを選ばずにカナダやオーストラリアとかに行くという選択肢もあります。それらライフポート政策を実施している国々は、BN(O)パスポートを所有しているかは不問なので、そういう国に行くって人ももちろんいます。全体的に色々なところに行けるようになって欲しいと思う一方、香港の人なのにイギリスに残れないんだ、という悲しい感じでもありますね。

村井：イギリスはかつて香港を領有していた国として責任があると思いますが、ただ日本も植民地支配の責任を十分に取ってないという批判があるので、言える立場ではないですね。

BN(O)パスポートを持っている人は一番年下で、24～25歳ぐらいという感じですかね。

伯川：なので今の中高生や大学生はほとんどカバーされてなくて、香港特別行政区パスポートを持っている人のほうが多いです。ただ、2019年の抗議活動はそういう世代が中心で、現時点のイギリスの政策だとちょっと救いきれてないです。他の国がもちろんカバーしてはいるんですけど、この輪をさらに広げて、香港人が海外に出やすいようにして、何かあった時に本当の意味のライフポートになってもらえればと思います。

5. 中国大陸出身者との関係、展望

村井：ありがとうございます。以上、イギリスの状況、日本の状況についてお話し頂いたのですが、参加者のみなさんから質問を受け付けたいと思います。

Q1(秋山)：伯川さん、Necoさんから移住先での中国大陸の方との軋轢について紹介がありましたが、伯川さんからは、中国人にも色々な人がいて、皆が香港人に敵対的なわけではないというお話がありました。中国のインディペンデント映画の世界では、中国大陸から香港に移住し、表現の自由を求めた映画人が結構現れた時期があり、そういう人たちは割と最近まで「香港は何でもできる」、「すごくいい所だ」と言っていたのですが、そういった形で中国から香港に行った人たちは、今どうなっているのでしょうか。それから、香港人が海外に出た後、そういうタイプの中国の人と現地地で合流し、何らかのネットワークが生まれたり、共同で何かをしたりする動きはあるのでしょうか。

伯川：中国から香港に移住してきた人も2タイプに分かれまして、そもそも移住の原因が経済的な理由で、仕事があるから移住したような人に関しては、香港に残りたいという傾向が強いと聞いています。ただし、逆に、天安門事件などで香港にやってきた中国大陸出身の方については、再出国を考えているという話を聞いたりしています。というのは、そもそも自由を求めて中国の体制から逃れてやってきたという背景があるので、中国大陸と全く同じになってしまうと来た意味もないです。

映画製作の話ですと、作りたいものが作れなくなってしまうということがあるので、メディア関係者と同様で、映画人とかも再出国する人が多く、移住先についてはカナダ、アメリカ、イギリスとかをよく聞きます。全員が全員出て行く、あるいは残るとかいうわけではないですが、自由を求めてやって来た人は自由がなくなることに敏感なので、自由を求めて再移住するという可能性は充分にあると思っています。

では香港人とのネットワークあるかと言いますと、まず日本においては残念ながらまだ薄いですね。まず日本にある香港の団体がまだまだ少ないというのが一つありまして、香港人だけでもまだまとめきれない状況なので、大陸中国人との間に何か連携が出来たという話はまだないです。ただし将来的に定住して行くにあたって、支援者として中国の方々がいらっしゃるので、そういったところと徐々にネットワークを作り上げて、香港だけのネットワークではなくて、中国も含めて、東南アジアも含むかもしれませんが、国際的な連携が取れていけたらいいなと僕も思っています。

Neco：日本と違ってイギリスは昔から香港から移住した人が多いので、コミュニティが既に出来上がってるんですね。中国人も香港人も、華僑として一緒になってコミュニティを作ってるみたいです。でも、2019年のデモ以降に香港からイギリスに来た人たちは、香港人だけのコミュニティを作ろうとしている感じがありますね。例えば、私が住んでる都市でも香港人同士が少しずつ繋がって、デモを支持してるかを聞いてからグループチャットに入れたいするようになりました。ある地方限定の香港人のみのネットワークは出来上がりつつあるという感じですね。

もちろん、イギリスでも香港を支援している中国人もいると聞いていますので、そういう人たちとは仲良くして行きたいですが、今のところみんな香港人だけで、という志向が強い感じですね。やっぱり敏感になっていて、中国人と聞くだけで「考えさせて」みたいな態度をとってしまいますね。これも仕方ないと思いますけど、これからどうなるかはわかりません。まず香港人だけのネットワークがちゃんと出来上がってから考えようかと思えますね。

村井：難しい問題だと思えますが、おそらく、Necoさんが顔や本名を出したりできないように、香港の人が安心して発言できる状況ではなく、香港人同士であっても、本当に仲間かどうか分からない。お互いを警戒しながら、信用できるか確認しながらやっている段階だと思うんですね。そういう状況なので、ネットワークを拡大するのはハードルが高いかと思えます。

最後に、香港の行末について、2022年はこういう年になって欲しいとかありましたら、短めにお願ひします。

伯川：正直なところ、香港は厳しい状況が続いております。毎週毎週悪いことが起きてて、より状況が深刻なっているように見えます。海外に居るからこそ、余計に香港の状況を憂えてしまいます。ただ、それでも香港人は生きようとしていますし、自分もNecoさんも、香港の情勢について海外に向けて発信を続けたいと思います。ぜひ皆さんも引き続き香港に関心を持っていただいて、香港のことももちろん、日本は自国のことにもより多く関心を持てる年になってほしいと思っています。

Neco：香港人は日本のことが大好きです。今年はコロナ禍が終わって、早く香港人が日本に旅行や留学とかできるようになってほしいという気持ちがあります。わたしも日本に行って温泉やライブも行きたいので、自由にいろんなところに行ける年になったら良いと思っています。

香港から離れた香港人としては、今年は香港についてもっと良い話題が聞けたらいいなと思えますね。伯川さんが言うように、今年に入ってからも毎日のように嫌な事が起きたりしてます。香港人は元々、とりあえず毎日平和に過ごせたらいいという考えを持っていて、私もデモが起こるまではオタクの趣味や美味しいものを食べに行くとか日常のことしか考えていなかったんです。でも香港人は2019年になって、無理やり政治のこととか、香港のこととか、自分のアイデンティティとかを考えなければならぬ状況に置かれました。少しでもいいので、今までの香港人のように毎日が平和で楽しめるようになってほしいと思っています。日本の皆さんにもぜひ自分の国で、自分の周りで何が起きているのか、将来はどうなるのかについて、是非是非関心を持って、いろんなことを見て考えてください。

6. 補論：香港人内部の分岐、言語的な適応

※講演会終了後、御二人の講演者に zoom の「チャット」で寄せられた質問に回答して頂いた。以下はそれを抜粋したものである。

Q2：以前にイギリスに移民した香港人には民主派だけでなく、建制派の人も少なくないと聞きました。大陸出身者による嫌がらせだけでなく、「港僑」の内部でも政治的な対立が見られるのでしょうか。またイギリスにおける香港料理の店などでも黄色（デモ支持者）の店、青派（香港政府・警察支持者）の店のような分化が見られるのでしょうか。

Neco：「港僑」の内部では黄色派と青派の対立はあるといえはあります。香港から来ている人には両方いますが、デモを支持する黄色派の人たちは黄色派の人たちとしか接触したことが多くあります。例えばチャットのグループでも、あなたは黄色ですか、青ですかという質問を管理者が聞いてから入れるかどうかを判断しています。だから、そもそも黄色の人たちと青の人たちとはあまり接触はしてない感じです。

わざわざ黄色のグループに入って香港人の情報を得ようとしているという話も聞かないことはないですが、黄色の人たちは青の人たちを警戒しているのです。対立というより、お互い近づかないことが多いです。青の人達も黄色の人達に明らかに喧嘩を売ってくるというような行動はしてないです。青の人たちも、香港政府支持や警察支持の話をすると黄色の人たちがイギリス政府に訴えて、自分がイギリスにいらなくなるのではないかと恐れている、というような話を他の香港人から聞いています。

それと、お店でも、黄色派のお店を支持したいけど、イギリスに来てる人たちにとっては選択肢が少ないですね。青派の店と知っていても、例えば香港料理とか飲茶とかで数十年にわたって営業している店で、黄色の店は本当に少ないので、もし香港料理を食べたい時は、イギリスに来てるのだからそこまでこだわらなくてもいいのではないかと、という態度をとっている人も多いです。

村井：例えば 1950～60 年代にイギリスに移民した人たちは、まだ香港で香港人アイデンティティが広がる前に移住しているので、自分たちを「香港人」だと思っていない人が多いと思われる。彼らのコミュニティも「香港人コミュニティ」としては作られていないのではないのでしょうか。NHK のドキュメンタリー「香港ディアスポラ～ロンドン・移民たちの 1 年～」の中でインタビューされていたロンドンの中華料理店の経営者が、中国政府支持の態度を強く表明していたのは印象的でした。ただ、Neco さんのお話を聞いて面白かったのは、こういう人たちはイギリスの社会に何十年も住んでいるから、そこで揉め事を起こしたくないとも思っていて、仮に中国・香港政府を支持していたとしても、それほど積極的に活動しない人が多いのではないかと思います。

Neco：わざわざ香港人の集会に行き喧嘩を売るような人は大体（大陸）中国人で、香港人には面倒くさがり屋の一面もあるので、青派の人たちも面倒なことに巻き込まれたいと考えているのではないかと思います。

伯川：移住した香港人も一枚岩ではなくて、香港の未来について目指す目標はみんな異なっています。例えば、香港独立を目指す人たちと一国二制度の存続を目指す人は、普通選挙の実施までは同じなのですが、その先は合意は取れてないと思います。仮に普通選挙が実施されても、香港人が一枚岩になって民主制度で励んでいけるかということ、正直何とも言えないです。

黄色派の店、青派の店の話なんですが、日本の話だと、明らかに黄色い店だと打ち出している店もあれば、あえて政治色を隠している店もあります。商売なのでどちらのお客さんも必要だという考え方もあります。海外に出たから選択肢が少ないので、その分断が弱くなったということはありますが、香

港ではうるさい人はすごいうるさくて、僕の友達でも黄色以外の店に行ったら絶交するみたいな人もいます。

Q3：香港は英語も公用語ですが、移住先のイギリス、オーストラリア、カナダなどで言葉の壁にぶつかる人は多いのでしょうか。

Neco：私は英語の中学の出身なので大丈夫でしたが、英語が不得意な友達もいますし、イギリスでも、地方によっては英語とは思えないほどひどいなまりのある所があると聞いてます。そういう面で、言葉で壁にぶつかっている人もいますけど、なんとかがんばっているようです。ただ、それはこの数年で香港から来た人の話ですが、例えば数十年前からイギリスにきている人でも、お年寄りとかだと自分のコミュニティにこもって中国語とか広東語しか喋りたがらない人も結構多いです。世代の違いは見てて面白いです。

伯川：僕と同じ学校のカナダ籍の友達で、英語がとても下手な人がいます。去年の6月くらいに完全移住でカナダに戻って、向こうで仕事を探していますが、英語の仕事をするのかと思っていたら、意外と広東語の仕事が多いと言っていました。移住した人が増えてきたので、公共サービスや銀行とかの窓口で広東語を喋れる人を募集していて、広東語のサービスを強化しているということです。特にカナダだからということかもしれません。実際香港人は、例えば日本に来れば日本語をしゃべってますし、言語能力が強いので、うまく生きていけると思います。

村井：日本の感覚からすると、香港の人は、広東語が母語なのに英語も標準中国語もできて、さらに日本語が出来る人もいて、色々な言語ができるというイメージはありますが、どれが得意かというところかなり差がありますね。ただ、色々な言語が一定程度ずつできれば、どれかを適用できるし、完全に話せなくてもコミュニケーションする能力が強いように見えます。

伯川：仕事関係で英語をしゃべっていて、「この人広東語しゃべれそうだ」と思ったら、案の定イギリスに移住した香港人だったことがあります。知っている人からしたら特徴的な英語を話すので、一発で分かるのですが、それで英語でコミュニケーションがとれないかというところでもなく、香港人は結構しぶといです。

後記

香港国家安全維持法（国安法）制定後の香港からの海外移住の動きについては、すでに、講演中で言及した、ロンドンの香港人移民取材したNHKのドキュメンタリー「香港ディアスポラ～ロンドン・移民たちの1年～」(初回放送2021年7月17日)や、各国の香港人受け入れ政策についてまとめた鶴園裕基「香港国安法の導入と『人の移動』をめぐる関係各国の政策動向」¹などがある。これに対し本講演では、イギリスの地方都市の状況や日本の香港人コミュニティとの比較、そして何より、移住当事者による移住先の生活の実感といった、違った目線で状況を紹介している点に意義があると思われる。

講演は2021年1月のものであり、諸事情により報告の公刊まで1年余りが経ってしまったが、香港から海外への移民傾向はその後も続いている。講演中で伯川氏が言及している1年で約9万人という香港からの出移民の数字は2020年央～2021年央のものだが、その後発表された2021年央～2022年央の数字では、香港住民の海外への純流出は11万3,200人であった²。Neco氏が言及する抗議活動への圧力という点については、2022年10月にマンチェスターの中国領事館前で中国政府への抗議活動をしていた香港人の参加者の一人が、領事館に引きずり込まれて殴打されるという事件が発生している³。

その意味では、香港人の海外移住をめぐる状況は大きくは変わっていないようにも見えるが、一方で、

中国大陸におけるゼロコロナ政策の急激な転換は流動的な状況をもたらしているように見えるし、また、それだけでなく移住者の増加と長期化は、移住者コミュニティはもちろん、香港それ自体にも何らかの変化をもたすかもしれない。香港や香港人移住者の置かれた状況の推移について、今後も注視していきたい。

※「前書き」及び「後記」は村井による。

記録・編集：むらい ひろし 所員 神奈川大学外国語学部教授

注

- 1 日本国際フォーラム・研究会「自由で開かれたインド太平洋時代のチャイナ・リスクとチャイナ・オポチュニティ」コメンタリー、2021年4月30日〈https://www.jfir.or.jp/studygroup_article/5595/〉。
- 2 「二零二二年年中人口数字」（香港特別行政区政府新聞公報、2022年8月11日）。ただ香港住民が海外に出る際に渡航目的を届ける必要はないので、厳密にはこの数字が全て海外移民を意味しているわけではない。
- 3 *Washington Post*, 10/20/2022.